

プロジェクト参画の御礼

南紀白浜未来会議

クレストリンク株式会社
代表取締役 久保市 恒太様

拝啓 実りの候、貴社ますますご清栄のこととお慶び申し上げます。
日頃より「一次産業農園支援オーナープログラム」にご参画いただき、誠にありがとうございます。皆さまのご支援のおかげで、今年も無事に実りの季節を迎えることができました。下記のとおり、活動状況をご報告申し上げます。

【1】事業概要

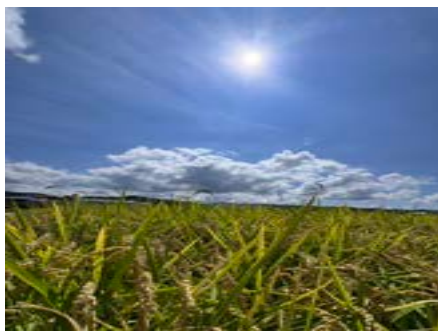
企業が農園区画の「オーナー」となり、和歌山県内の生産者が丹精込めて育てたブランド米を、社員向け福利厚生や取引先への贈答品としてお届けする取り組みです。皆さまにご参画いただいているからこそ、この仕組みが成り立っています。

米そのものの価格競争ではなく、企業のブランディングや社会貢献を含めた商品として届けることで、既存のスーパー販売とは競合しない新しい形の一次産業支援を実現しています。

収益の一部は、地域の農業支援だけでなく、教育・福祉の現場への寄付にも充てており、一つの田んぼから始まった取り組みが、皆さまのご支援のおかげで地域全体を巡る仕組みへと広がっています。ありがとうございます。

【2】農園風景

皆さまのご支援のおかげで、今年もこんなに豊かな実りを迎えることができました。まずは田んぼの様子をご紹介します。



看板は綺麗な状態で保存する目的と、農作業の都合上、看板を状況により適時取り付け外しをおこなっております。

皆さまのご支援のおかげです。ありがとうございます。

【3】 参画農家さんの声

本プロジェクトにご参画いただいている農園の一つ、井戸本農園の井戸本拓也さんに、インタビューにご協力いただきました。



米農家 井戸本拓也さん（和歌山県西牟婁郡上富田町） 井戸本農園

子どもの頃、私は農業が嫌いでした。家族経営だったので、幼い頃から休日は田んぼの手伝いをさせられていて、それを同級生に指をさされて笑われたこともあります。「父の仕事は、人から笑われる仕事なんだ」と、子どもながらにショックを受けたこともありました。

社会人になり、生まれ育ったこの上富田町に戻って家業を手伝うようになってから、少しずつ考え方が変わっていきました。県内で唯一ダムのない清流・富田川の伏流水で丹精込めて育てたお米を、対面販売でお客様に直接お渡しする。その時にいただく「ありがとう」「美味しかった」という生の声が、何よりのモチベーションになっていたんです。父の仕事は、こんなにも感謝される仕事だったのか——そう気づいた時、初めて誇りに思えました。

ただ、対面販売には配達距離という壁がありました。地元で食べてもらいたい気持ちは今も変わりませんが、和歌山は人口も観光市場も限られていて、地元消費だけで経営を続けるのは正直厳しい。そんな時にプロジェクトの方からお声がけをいただき、「一次産業農園支援オーナープログラム」に参加させていただくことになりました。皆さまがオーナーとしてご支援くださっているおかげで、こうして安心して田んぼに向き合えています。本当にありがとうございます。

事業承継や後継者不足は、和歌山の農業が共通して抱える課題です。それでも、こうして外から関わってくれる企業や社員さんが増えるたびに、「この田んぼは、まだ必要とされている」と思えるようになりました。地元への想いを大切にしながら、地元の外ともつながっていく。地産他消という形が、私たち農家にとっての希望になっています。皆さまのご支援があってこそ、この田んぼは今日も豊かに実っています。ありがとうございます。

【4】 寄付先からのお声

今回の売り上げの一部は、教育・福祉の現場への寄付に充てさせていただいております。皆さまのご支援があってこそ実現できた取り組みです。今回、寄付先のご担当者様にインタビューにお答えいただきました。



和歌山県立南紀はまゆう支援学校 担当者様

正直、最初にお話をいただいた時は驚きました。一次産業を応援するプロジェクトが、私たちのような支援学校にまで目を向けてくださると思っていたいなかったので。地元の農業を支える取り組みが、こんな形で福祉や教育の現場にもつながってくるんだと知って、素敵な活動だなと感じましたし、私たちのようなところにもご支援いただけることが、本当にありがたかったです。

いただいた寄付は、10月16日に開催される県内支援学校陸上競技大会に出場する女子リレーチームのユニフォーム購入に使わせていただく予定です。子どもたちに話をすると、とても喜んでいました。大会という一つの目標に向けて、自分たちのユニフォームで走れるというのは、それだけで励みになるみたいです。

ユニフォームは今回の大会限りではなく、来年度以降も継続して使っていけると伺っています。デザインについても、企業ロゴを前面に大きく入れるのではなく、生徒たちや学校が主役になるようにと配慮いただいていた、そうした細やかな気遣いにも、支援してくださる方々の想いを感じました。

寄付をきっかけにお話しさせていただいた面談では、ユニフォームの件だけでなく、地域農業や障害福祉、移動支援、地元での雇用まで、色々なテーマで意見交換をさせていただきました。一度きりの寄付で終わるのではなく、地域の商売を強くして、そこで生まれた利益を福祉や教育の現場にも継続的に還元していく仕組みを一緒に考えていけたら、というお話は、私たちにとっても大きな希望になりました。

こうして外から光を当てていただけることは、学校単体ではなかなか実現できないことです。子どもたちが自分たちのユニフォームを着て、胸を張って走る姿を、来年以降も見続けられることを楽しみにしています。



皆さまのご支援のおかげで、農家さんの田んぼも、学校への寄付も、こうして形にすることができました。改めて、心より御礼申し上げます。ありがとうございます。

来年も、皆さまのお手元に、美味しいお米をお届けできるよう、引き続き準備を進めてまいります。
末筆ながら、貴社のますますのご発展を心よりお祈り申し上げます。

敬具
南紀白浜未来会議